

近代日本文学を読み解く

33
の扉

文学が

もつと

面白くなる

著者●金井景子、金子明雄、紅野謙介、小森陽一、島村輝

文学がもっと面白くなる
近代日本文学を読み解く33の扉

1998年3月13日 初版発行

著者／金井景子・金子明雄・紅野謙介・
小森陽一・島村輝

装幀／スタジオギブ（川島 進）

印刷・製本／ダイヤモンド・グラフィック社

発行所／ダイヤモンド社

〒100-8060 東京都千代田区霞が関1-4-2

<http://www.diamond.co.jp>

電話／03・3504・6451（編集） 03・3504・6517（販売） 振替口座／00190-6-25976

©1998 K.kanai & A.kaneko & K.kono & Y.komori & T.Shimamura

ISBN4-478-93032-5

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

近代日本、
文庫を読み解く

文学が 面白くなる

著者●金井景子、金子明雄、紅野謙介、小森陽一、島村輝

目次

はじめに……………6

第一章

文学を楽しむために

- 1◎笑う小説——あるいは、眉間にシワの文学体験よ、さようなら！……………10
- 2◎コピート詩のあいだ——ことばの〈異化〉の方法あれこれ……………17
- 3◎「しりとりに」との訣別——近代俳句の出発点……………23
- 4◎あなたは何が欲しいのですか？——描かれたセクシュアリティ……………28
- 5◎女歌へのアプローチ——ある女性歌人の誕生……………36
- 6◎「こりやまるで小学生が書いたような詩だ」——創造的言語行為の切り開く地平……………41
- △アンソロジー——暴力の近代日本文学……………47

第二章

文学の生態学

- 7◎小説家ほど素敵な商売はない——職業としての文学……………58
- 8◎「階級性」突破の楽しみ——短詩型と結社をめぐってお話……………64
- 9◎ものがたる詩人・うたう小説家——詩と散文を結ぶもの、その原理……………70

第3章

言葉のテクノロジー

- 10 ◎メディア・クリエイターとしての作家たち——活字と遊ぶ……………77
- 11 ◎編集者が文学を生んだ——出版資本のなかのマネージメント……………83
- 12 ◎政治の文学性、文学の政治性——近代国民国家と物語……………90
- △アンソロジー2△風景の近代日本文学……………97
- △アンソロジー3△恋人たちの近代日本文学……………107

第4章

文学に刻まれた歴史

- 13 ◎奴隷のリズムが変わるとき——三一拍から三二拍へのシフト・チェンジ……………116
- 14 ◎すべての芸術は音楽にあこがれる——純粹音楽としての詩は可能か……………122
- 15 ◎翻訳にひそむ力——異質な言語と言語のあいだに……………128
- 16 ◎文学に見る日本語の変遷——文体をめぐる闘い……………134
- 17 ◎夢みる読者はいかにして小説の主人公になるか——感情移入のひみつ……………140
- 18 ◎現代詩は難解か？——現代詩のイメージ・システム……………146
- 19 ◎季語は俳句の生命線？——シミジミ日本の食欲なコレクションをめぐって……………152
- 20 ◎五・七・五からの冒険——自由律ってどんなリズム？……………158
- △アンソロジー4△食べ物近代日本文学……………163
- △アンソロジー5△禽獣の近代日本文学……………173

- 21 ◎「私小説」の不思議な魅力——半径三メートルの現象学……………180

ふたたび文学の始まりへ

22◎小説を生きる作家たち——あこがれのベストセラー作家……………	186
23◎ホームドラマの遙かなる故郷——「家庭小説」という事件……………	192
24◎「新体詩」の誕生と発展、その末路——文語定型からののはじまり……………	199
25◎「短歌」は誰のものか——日本語人たちの三一文字……………	205
26◎国境を越える表現——日本語文学がひろがっていく……………	210
27◎近代文学と自然科学——「どうも物理学者は自然派じゃ駄目の様だね」〔三四郎〕……………	216
へアンソロジー6 奇妙な病人たちの近代日本文学……………	223
28◎詩のミニマリズム——伝統的短詩形文学と詩を分かつもの、その原理……………	232
29◎何が詩か——散文と詩を分かつもの、その原理……………	239
30◎文学と暴力の記憶——忘却と排除の装置……………	245
31◎文学全集という制度——教養の蓋をこじあける……………	252
32◎「小説」はいつ生まれたのか——近代文学とそれ以前……………	258
33◎文学に感動することとは——自分のテキストと出会うために……………	264
おしまいに……………	272
本書で取り扱ったテキストたち……………	280

はじめに

この本は次のような人のためのものです。

- 本を読むのは勉強だという呪縛から逃れられない人。
- 洋物の小説は読むけど、日本の小説はちよつとねという人。
- 短歌や俳句はすでに絶滅した古典芸能の復興保存だと思っている人。
- 詩人は海辺で遠くを見つめる変な人だと思っている人。
- 文学は俗世間からかけ離れたユートピアだと信じている人。
- 文学に近づく大変なものを背負い込まれそうで怖い人。
- 文学なんてどうでもいいやと思っている人。

一見するとそう見えないかもしれないけれども、学校で教えてくれない文学にまつわる裏話やちよつと面白いエピソードを読者にそつと耳打ちすること、隠された事実をつなぎ合わせて従来の文学観を書き換えることは、けつしてこの本の中心ではない。文学に興味は感じているのにアプローチの糸口がつかめないあなた、文学に対する嫌悪感に決着をつけたいあなた、知ってるつもりでよ

くわからない文学をわかりたいあなた、とにかく自分と文学のかかわりをもう一度見直してみたい、見直してもいいと考えているあなたに、その手引きとなる羅針盤を提供するのがこの本のねらいなのである。そして、願わくば、その羅針盤をたよりに、それまでの自分をまったく変えてしまうような読書という冒険に乗りだしてほしい。

ただし、この本の提供する羅針盤はいささか奇妙なものかもしれない。小説を読んだらとりあえず笑ってみようという主張があつたり、ぼんやりと小説を読むと囚われた性欲に取り憑かれるよという脅しがあつたりするわけだから、これまでの文学という常識にびつたりとあてはまりにくいことは確かだ。しかし、だからこそ、この羅針盤をたよりにした読書の冒険も常識の枠に収まらないハブニングに満ちたものになりえると言えるだろう。ハブニングさえもがあらかじめ組み込まれているデイズニーランド型の冒険アトラクションもそれなりに楽しいけれども、文学を読むというまったく先の見えない冒険もスリリングだよというのが、この本のもう一つのメッセージなのである。もちろん、先の見える安全運転を好む読者もあるだろうが、そのような読者には、ここで示される文学の読み方にクラクションを鳴らす楽しみを選んでいただきたい。その場合も、ジュラシックス・パークぐらいのスリルは味わえるはずだ。

いささか無責任でもある著者一同は、読者が少し無謀なくらいの読書の冒険に乗りだすことを期待するものである。

第1章

文学を楽しむために

1 笑う小説

——あるいは、眉間にシワの文学体験よ、さようなら——

文学を笑っちゃいけないなんて誰が決めたんだろっ。

お笑い小説のジャンルを別にすれば、ホロリにもシミジミにも、あるいはブラックな世界にも行きつかない小説の笑いは、どうも低く見られてきたきらいがあるようだ。けれども、実のところ、近代文学の世界は思わず笑える小説に満ちている。

黙って眉間にシワを寄せるだけが文学じゃない。

小説を読む読者の反応は様々だ。感動や哀しみに涙する、満ち足りた気分に入る、心の奥底をえぐられる不快感にゾツとする、めまいに襲われて揺らぐ世界をかいま見る、金返せと怒りたくなる……。思わず笑ってしまう小説、これがこの項のテーマだ。数ある小説のジャンルにはコントだのユーモアだのナンセンスだのというものがあるが、それらは読者の「笑い」をとることを主なねらいとする。小説の本流とは見えないにもかかわらず、それなりの奥深い世界を持っている。というよりも、笑いをとることをねらってきちんと笑わせるのは、小説の技巧の中でも最高級、超A難度の技であって、なおかつ、後世の読者の笑いもとるとなると、それは奇跡に近いことなのだ。そういう作品に出会ったら、妙な解釈などやめて、ひたすら畏敬の念をもって大笑いすればよい。それに対して、まじめに書いてあるにもかかわらず、思わず笑ってしまう小説も存在する。

「はじめに書いてあるのに思わず笑ってしまう」という経験は、一度でも教室で「文学」を教わったことのある人にはおなじみのものかもしれない。（近代文学史上の重要度）×（思わず笑ってしまう頻度）＝（教室で笑われる指数）の最も高い作品は、間違ひなく田山花袋『蒲団』であろう。小説の結末部分、明らかに花袋自身をモデルとする売れない中年文学者時雄は、寄宿させていた若い女弟子芳子の去った自宅の二階に上がり、彼女の使っていた蒲団を引き出す。

夜着の襟の天鷲絨の際立つて汚れているのに顔を押付けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂いを嗅いだ。

性欲と悲哀と絶望とが忽ち時雄の胸を襲った。時雄はその蒲団を敷き、夜着をかけ、冷めたい汚れた天鷲絨の襟に顔を埋めて泣いた。

薄暗い一室、戸外には風が吹暴れていた。

時雄は芳子のことを秘かに想っていただけで、二人のあいだに性的な関係は成り立っていない。時雄の側から見れば、京都の大学生と関係をもっていた芳子に翻弄されたといえないこともなく、それが彼の悲哀を強めるのだが、今日の読者にとって、ここを読んで笑いをがまんするのは大変である。とにかく、時雄の行動が決定的にヘンであぶなくておかしい。それを語る地の文もまた、ひどく大げさできまじめでおかし

(1) 田山花袋 小説家（一八七〇—一九三〇）群馬県生まれ。本名、録弥。明治四〇年に『蒲団』を発表。その自己告白的性格が日本の自然主義文学の方向に決定的影響を与えたとされる。代表作として「重右衛門の最後」「生」「田舎教師」など。

い。最後の一文にあらわれる、蒲団の中で泣く時雄（＝閉ざされた個人世界）と外の嵐（＝外界の自然あるいは社会）という対比の構図は、この時期の小説によく見られるもののだが、これがおかしさの決定打となっている。まあ、花袋作品のおかしさは、現代の代表的小説家にして小説読みである高橋源一郎も指摘している周知の事実だから、これ以上説明することもないだろう。しかしながら、この小説が発表された当時の読者はだれも笑っていない。それどころか、この小説のシリアスさにびっくり仰天したのである。作者の花袋だって後の世で自作が笑われるなどと想像したことすらなかっただろうから、ちよつと気の毒だが、読者の感性やライフ・スタイルが当時とはまったく変わってしまったのだ。

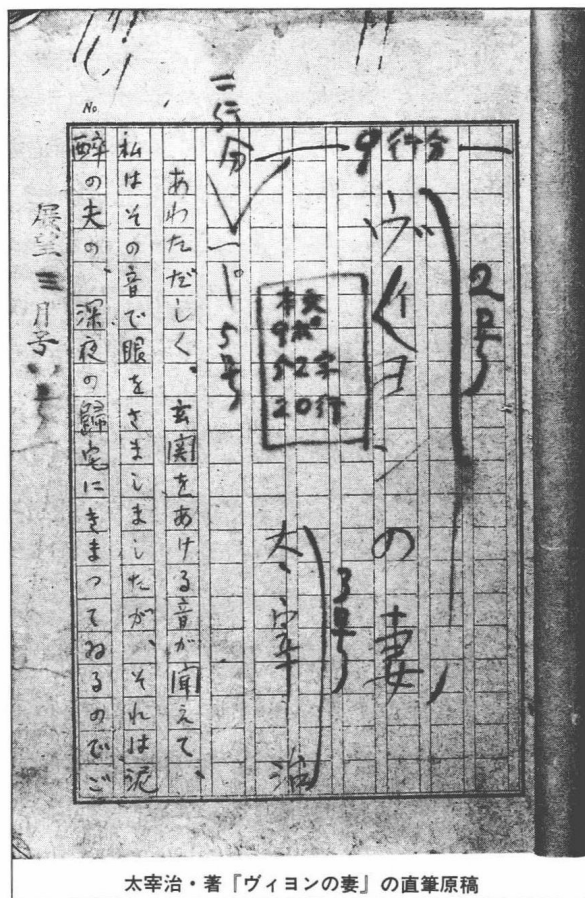
今読んでおかしいものが、なぜ当時は大シリアスなのかという疑問は、文学研究を志す人の研究課題になりそうだが、普通の読者にとっては、素直に笑っておくのがこの小説に対する誠意ある態度というものであろう。

太宰治に『トカトントン』⁽³⁾という短編がある。タイトルからして陽気で楽しそうなのだが、敗戦の日以来、⁽⁴⁾何かしようとする「トカトントン」という金づちで釘を打つ音が聞こえてきて、すべてがどうでもよくなってしまうという悩みを抱えた青年が、敬愛する作家に悩みをうちあける長い手紙と、それに与えた作家の短い返答からなりたつ小説で、けっこうシリアスである。この作品を含む短編集『ヴィヨンの妻』の裏表紙には「新生への希望と、戦争を経験しても毫も変らぬ現実への絶望感との間

(2) 高橋源一郎「文学がこんなにわかっていいかしら」（一九八九年刊）。

(3) 太宰治 小説家（一九〇九—一九四八）青森県生まれ。本名、津島修治。代表作に「道化の華」「富嶽百景」「ヴィヨンの妻」「斜陽」「人間失格」など。「トカトントン」は昭和二年発表。

(4) 敗戦の日 昭和二〇年八月一五日のことです。



を揺れ動きながら、命がけで新しい倫理を求めようとした晩年の文学的総決算ともいえる代表的短編集」と書かれていて、これまたシリアスである。ちなみに、「トカトヘトン」の発表は昭和三年一月、太宰が山崎富栄と玉川上水で心中するのは三年六月。にもかかわらず、やっぱりこの小説はおかしい。

もう、この頃では、あのトカトントンが、いよいよ頻繁に聞え、新聞をひろげて、新憲法を一条一条熟読しようとする、トカトントン、局の人事に就いて伯父から相談を掛けられ、名案がふっと胸に浮んでも、トカトントン、あなたの小説を読もうとしても、トカトントン、こないだこの部落に火事があつて起きて火事場に駆けつけようとして、トカトントン、伯父のお相手で、晩ごはんの時お酒を飲んで、もう少し飲んでみようかと思つて、トカトントン、もう気が狂つてしまつてゐるのではなからうかと思つて、これもトカトントン、自殺を考え、トカトントン。

最後になると動作が一段落するまで待つてくれなくて、自殺を考える途中でトカトントンである。トカトントンがめちやくちやに鳴り響く様子は、怖くて哀しいけれども、おかしい。ただ、そのおかしさは、あつけらかと笑えてしまふおかしさというよりも、薄暗い酒場のカウンターの隅っこでうつむきながらグラスをかたむけてゐる男と偶然目があつてしまつて、その上目づかいに笑いかけられた顔に思わず愛想笑いを返してしまつた時のダルな笑いという感じである。(5) おかしいけれども、やつぱり怖くて哀しいのだ。もつとも、そういう感じ方こそが太宰神話という「眉間にシワ」系の文学主義に犯された感性なのかもしれない。このおかしさを、徹底的にあつけられんとした笑いに変換してみせたのは荻野アンナであつた。(6)

(5) 林忠彦が昭和二二年に撮影した銀座のバー「ルバン」での太宰の肖像写真を参照してください。
(6) 新潮日本文学アルバム 19 太宰治

(7) 荻野アンナ 「私の愛毒書」(一九九一年刊)。

(8) 質屋 質屋さんからの借金の担保となる品物のこと。普通は質屋さんに預ける。

(9) 宇野浩二 小説家(一八九一—一九六二)福岡県生まれ。本名、格次郎。代表作に「苦の世界」

太宰のおかしさが、それを通して読者をシリアスな場所に導く戦略だとすれば徹底的にふざけた状況の気だるい笑いが、一種の突き抜けた笑いに反転するケースもある。

自分の今着ている着物さえ質草⁽⁷⁾になっっている着道楽の生活破綻者が、質屋の蔵に自分の着物の虫干しにいく話「蔵の中」を代表作とする宇野浩二⁽⁸⁾の小品「屋根裏の法学士」は、文学者を志しても、法律家を志しても、根気と勇氣と常識を欠くために挫折してしまい、下宿の押し入れ（屋根裏にあたる）にこもつてらちもない突飛な夢想を続ける貧乏青年の話である。この作品は、江戸川乱歩⁽⁹⁾の明智小五郎⁽¹⁰⁾もの名作「屋根裏の散歩者」にアイデアを提供したことでも有名だ。乱歩は、押し入れにこもる趣味を軸にして犯罪者のシリアスな心理世界を構築するのだが、宇野の屋根裏には、そこから展開していく裏側（闇）の世界はない。

主人公乙骨三作⁽¹¹⁾は、大学を卒業しても何者かになれずに貧乏であるばかりでなく、あまりのだらしなさゆえに郷里の母親を扶養する義務もとらげられて、何者かにならねばならない理由さえも失ってしまっている。アイデンティティ⁽¹²⁾の危機どころか、アイデンティティそのものを構築する根拠がないのだ。そのため彼はひたすら押し入れでの夢想に耽ることになる。夢想は「浮き世」（実社会）での彼の存在の重みと正確に反比例するのである。社会との接点を全くもたない彼の夢想は、どんどん突飛な方向に流れていく。あげくの果てには、昔得意だった幅跳びを応用して空を飛ぶ方法を思いつき、それを下宿の廊下で実験してみるにいたる。踏み切る拍子にすべってこ

「子を貸し屋」など。「蔵の中」「屋根裏の法学士」は、いずれも大正七年の作品。

(9) 江戸川乱歩 小説家（一八九四～一九六五）三重県生まれ。本名、平井太郎。雑誌「新青年」を中心に、多くの探偵小説を発表し、本格推理小説を完成させる。「屋根裏の散歩者」は大正一四年に発表された、「D坂の殺人事件」「心理試験」などにつづく明智小五郎を生み出す。

(10) アイデンティティ 自分はいったいどういう人間なのかという自己認識のこと。自分自身の認識と、周囲の親しい人々のとらえ方、社会的なレベルでの客観的な位置づけが調和していないと、いろいろな不都合が生じる。